◆ 講 演

米国国境を越える移民たち

以下は2021年3月14日に開催されたオンライン講演会の内容を講師がまとめたものである。当日は、メキシコから参加の平井伸治氏が米国へ移住したメキシコ人の「ノスタルジー」の形成過程やその郷愁の念が移住先での生活に与えた影響について講演。中川正紀氏は平井講演にコメントしつつ米国へ移住するエルサルバドル人のケースについて報告した。

講演

在米メキシコ人のノスタルジーと都市空間の変容

平　井　伸　治

はじめに

本講演の趣旨は、2009年に出した著書［Hirai 2009］と、数年前に牧野冬生氏と出した共著の論文［牧野・平井 2017; Makino and Hirai 2019］をもとに、在米メキシコ人移民のノスタルジーという感情に注目しながら、国境を越えた繋がりの構築・維持・強化と、移住先と送り出し社会における都市空間の変容について議論するものである。

講演の構成に関しては、まず、メキシコ・ハリスコ州と米国カリフォルニア州で行った民族誌的調査の概要とこの事例の移民研究の中での位置づけについて説明し、またどのように感情を研究対象として概念化したかを解説する。そして、1）在米メキシコ人移民のノスタルジーの語りと故郷のイメージ、2）故郷との繋がりを構築するために移民が行う様々な実践、という2つの点を説明しながら、そうした実践によってどのように国境の両側で都市空間が変容していったかについて議論する。最後に、著書のタイトルに使った「ノスタルジーのポリティカル・エコノミー」という概念について説明する。

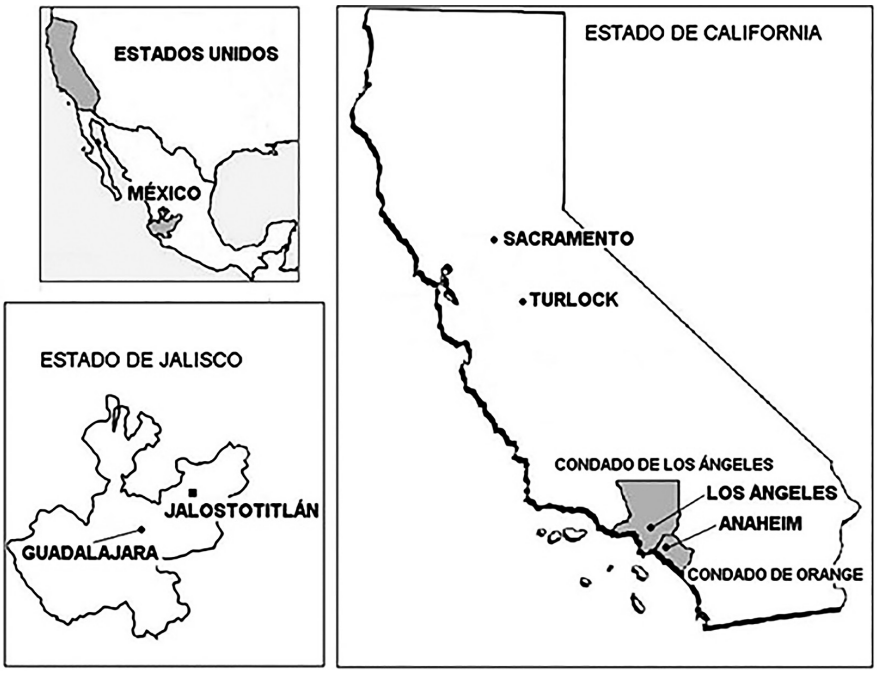
Ⅰ．事例研究の概要

1. 民族誌的調査と米国への移民の歴史

この移民とノスタルジーに関する研究は、メキシコ・シティのメトロポリタン自治大学の大学院在学中に、メキシコ西部のハリスコ州ハロストティトラン郡のハロストティトラン市（Jalostotitlán）で2000年8月に予備調査を行ったことをきっかけに始まった。同市は、地元民と同市出身の移民からはハロス（Jalos）と呼ばれている[1]。その後、2003年から2006年まで同市で本格的な民族誌的調査を行い、米国カリフォルニア州でも2004年に一ヶ月間のフィールドワークを行い、主にハロス出身者が多く住む南カリフォルニアのロサンゼルス郡とオレンジ郡と北カリフォルニアのトゥールロックという町で調査を行った（**図1**参照）。その後、10年ほど前から建築家兼人類学者である牧野氏と移民と住宅建設に関する共同研究を行い、ハロス市でフィールドワークを数回行った。

この二つの調査では、ハロス市では地元の祭りの時期に一時帰国した20代から70代の移民、過去に米国で働いた経験がある地元民、市役所職員、郷土史家、自営業者、教員、建設業者など非常に幅広いタイプの地元民に聞き取り調査を行った。また、様々な宗教行事やホームステイ先の家族の祝い事やサッカーの社会人リーグに参加することで、交友関係を広げ参与観察を行った。カリフォルニアでは、ハロス市で調査に協力してくれたインフォーマントと再会し、移住先での日常生活を参与観察するだけでなく、彼らから紹介されたハロス出身の移民にも聞き取り調査を行った[2]。

図1　米国・メキシコのフィールド



出典［Hirai 2009: 27］

ハロス市は現在は小規模な地方都市だが、元々16世紀のスペイン人征服期に建てられた集落で、その後スペイン人の入植によって、ランチョと呼ばれる農場によって構成される農牧畜業をなりわいとする農村社会へと発展していった[3]。ハロス市は1920年代まで、被昇天の聖母像が祀られた教会の周りに約3千人の住民が暮らす小さな集落で、その周辺に散在していたランチョに2万人近くの住人が暮らしていた。しかし、1940年代以降米国への移民が増えだしてから、ハロス市の郊外や郡の他の集落に点在していたランチョからハロス市の中心部への人口移動が起こり、結果として、1970年にはハロス郡の人口の60％以上がハロス市に集中して住むようになった。筆者が調査を行った当時は、ハロス郡の人口は約2万8千人で、ハロス市にはその75％近くの約2万1千人が住んでいた［Hirai 2009: 178–181］（**表1**参照）。このランチョからハロス市への人口移動は、米国への「移民」現象と密接に繋がっており、米国に出稼ぎに行く男性が残された家族の安全などを考慮して、農場からハロス市の中心部に住居を移す傾向が顕著となっていった結果、ランチョとハロス市の人口比率の逆転現象が起こった。

表1　ハロストティトラン郡と市の人口の変遷[4]

年	ハロストティトラン郡人口（人）	ハロストティトラン市人口（人）	備考
1900年	23,036	2,863	郡人口約12％がハロス村に
1910年	–	2,533	
1921年	–	3,393	
1930年	–	4,001	
1940年	15,616	6,467	郡人口約40％がハロス村に
1950年	18,287	8,151	郡人口約44％がハロス村に
1960年	27,294	13,675	郡人口約50％がハロス村に
1970年	18,467	11,719	市に昇格 郡人口約63％がハロス市に
1980年	19,694	13,031	郡人口約66％がハロス市に
1990年	24,497	18,089	
2000年	28,110	21,291	郡人口約75％がハロス市に
2005年	28,462	21,656	郡人口約76％がハロス市に
2010年	31,948	24,423	郡人口約76％がハロス市に
2020年	32,678	24,890	郡人口約76％がハロス市に

ハロス郡から米国への「移民」現象は、20世紀初頭から始まり、1906年には米国へ労働者が流出することでハロス郡において労働力不足の苦情があったという記録が残っている。メキシコ革命が起こった1910年代と宗教上の内戦であるクリステーロス戦争が起こった1920年代後半には、国内の動乱から避難する形でハロスから米国に移住する住民もいた。ただ、労働目的で大量のハロス市住民が米国に移民するようになったのは、1940年代から60年代のブラセロ・プログラムという、メキシコ・米国の二国間協定で合法移民が主にカリフォルニアなどの農業労働力と

して募集された時期であった。このブラセロ・プログラム期の移民パターンは、冬の農閑期にはメキシコに戻り、翌年の栽培の時期に出稼ぎに行く循環型であった。

ブラセロ・プログラムが終了した1964年以降も、米国に出稼ぎに行く人の流れは続き、彼らは非合法な形で国境を越え、農業だけでなく、都市での労働にも従事するようになった。農業部門では農閑期の冬には仕事がなくなるため、故郷に帰省する代わりに米国に残り、年間を通して安定した雇用が見込める都市に就職先を探す移民が出てきた。この時期、まず男性が同郷出身者のネットワークを利用して米国に渡り、仕事を見つけ、その後ある程度生活が安定したら、妻や他の親族を呼び寄せるようになった。そして子供が米国で生まれた家庭では、1965年の移民法改正のおかげで、それまで不法滞在者であった親兄弟が滞在ステータスを簡単に合法化できるようになった。

80年代になると、ハロス出身の移民が米国に定住する傾向が顕著になってきた。前述の1965年の移民法改正によって、米国市民の親族が簡単にグリーンカードを取得できるようになり、さらに80年代の半ばには通称シンプソン・ロディーノ法と呼ばれる移民法改正が行われ、そのおかげで滞在ステータスを合法化できたハロス出身の移民もいた。

家族の呼び寄せ、合法ステータスの取得に加えて、移住先での住宅購入も定住化の要因の一つであった。ハロス出身者で不動産業を営む移民がいたこともあり、ロサンゼルス郡やオレンジ郡の都市化のプロセスが急速に進んでいた地域では、移民労働者の貯金で購入可能な価格の物件を購入するハロス出身者が多くいた。中には、都市化の初期段階で購入した住宅を都市開発が進み土地・住宅価格が高騰してから、転売する移民も出てきた。このように、南カリフォルニアの移住先の都市化のプロセスと「移民」現象は密接に結びついており、農村から都市への労働力の移動によって、メキシコ人移民が労働者として都市化の担い手になっていっただけでなく、オレンジ郡などではオレンジ果樹園が住宅地として開発されるプロセスに、住宅購入者、定住者として関与し、受け入れ社会の人口増加にも貢献した。

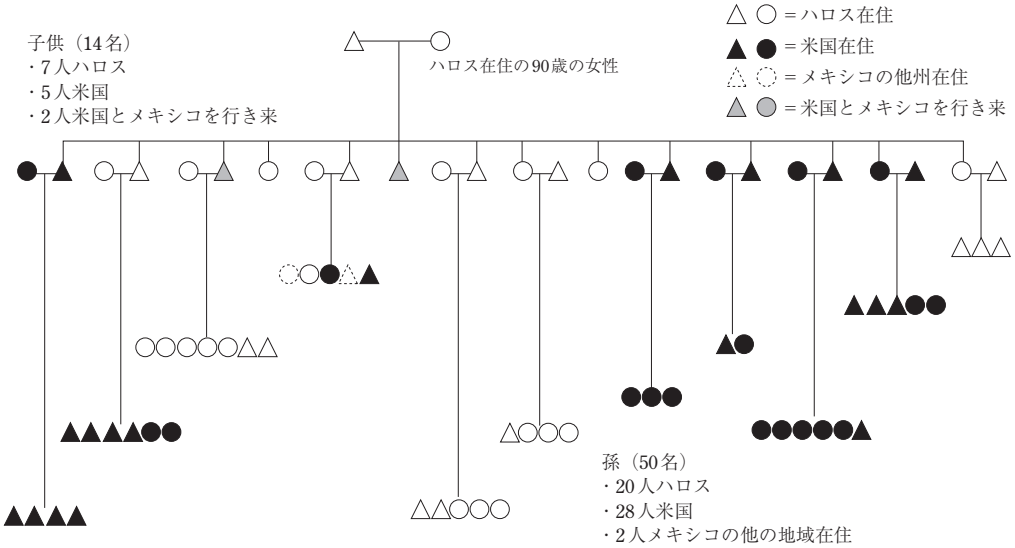
ハロス出身の移民の定住化のもう一つの要因は、移民労働者の中から、都市部で独立し起業する移民が出てきたことであった。先ほど言及した不動産業だけでなく、メキシコ料理に欠かせない食品を販売する雑貨店、運輸業、レストランやホテル業などで企業家として米国で経済活動を行うハロス出身者が、すでに1980年代の初めには多くいた。こうした移民の企業家は、同郷出身者に雇用の機会を生み出すだけでなく、同郷出身者も含めた急増するメキシコ人人口を顧客としていたという側面も持つ。例えば、1980年代初頭にアナハイムに出店したハロス出身者が経営する雑貨店は、主にメキシコ人移民労働者とその家族を顧客としていたが、メキシコ人人口の増加のおかげで、店舗数を増やし、現在ではオレンジ郡とロサンゼルス郡に30店舗以上を経営するスーパーマーケットのチェーン店に成長した。

ハロス出身者が定住する傾向にあったにもかかわらず、故郷のカーニバルの時期と守護聖母の祭りが行われる8月には毎年多くの移民とその家族が一時帰国をし、このUターンは米国での滞在資格に関わらず、行われてきた。90年代に入ると、移民一世だけでなく、米国で生まれ育った二世や三世も参加するようになり、より大規模な形で起こるようになった。

2. トランスナショナルな家族

20世紀初頭から米国への「移民」現象が続いてきたハロス市では、何世代にも亘って米国への出稼ぎ労働と移住が住民にとって選択肢の一つとなってきたため、家族の在り方も再編成されており、「国境を通して再生産と労働生産の編成をする親族集団」という意味でのトランスナショナルな家族［Mummert 2012: 153］が形成されてきた。ハロス市の住民にとって、米国への「移民」現象がいかに根強く、また前述の一時帰国がどれほど大規模な形で起こるかを説明する上で、ハロス市で筆者がフィールドワークを行った際にお世話になったホームステイ先の当時90歳の女性の家系図を紹介したいと思う。

図2　トランスナショナルな家族の例



この女性は結婚後、14人の子を授かり、そのうちの5人が米国に移住し、7人がハロス市に残り、残り2名が米国とメキシコを行き来している生活をしていた。孫は50人いて、28人が米国在住、20人がハロスに住み、2名がメキシコの他の都市に暮らしていた（**図2**参照）。

国境を跨いで構成される大家族の構成員にとって、ハロス市で毎年8月に行われる守護聖母の祭りと2月のカーニバルの時期は、米国とメキシコの様々な場所に暮らす親族が再会する機会となっている。地元の祭りの時期には、米国に住む子供やその配偶者、孫の全員がハロス市を訪れないにしても、米国から一家族の訪問があるだけで、普段は空き部屋が多い家が満室になることをよく目にした。普段は国境を跨いで複数の場所に散在して暮らす家族のメンバーだが、故郷における儀礼の時間と空間では、トランスナショナルな家族が可視化されるのが、一時帰国の時期のハロス市の特徴とも言える。

3. 農村社会から小規模な地方都市への移行と様々な変化

ハロス市は元々人口3千人未満の小さな集落で、市の郊外と郡内の他の集落に多く存在していた農場に人々が住む農村社会であったが、米国へ出稼ぎに出た男性が家族を呼び寄せ、米国に定住する傾向が強まった。一時帰国が大規模な形で起こるようになってからは、後述のように、ハロス市では第一次産業に従事する人が減り、第三次産業に従事する人が増加するようになった。ハロス市の中心地の周りにあった農場の耕作地は、住宅地として開拓されていった。

写真1　ハロス市の中心街

写真2　ハロス市の新興住宅街に建てられた米国在住者の住宅

写真3　ハロス市郊外に建てられた住宅

そして、地元の経済基盤、政治、社会化のプロセスが「移民」現象と密接な形で結びつきながら変化していった。例えば、政治的側面では、出稼ぎ労働を止め故郷に定住するつもりで帰国した元米国在住者が市長の職に就いた例や教会への寄付や地元の祭りの行事のスポンサーになる例があり、米国在住者や移住歴のある市民が地元のリーダーとして活躍している。経済面では、移民送金の大半が故郷に残った家族の生活費や住宅の建設費や維持費に使われており、商業と建設業の重要性が高まった。また米国在住者が米ドルで市内の土地を購入し、住宅を建設する傾向が

強まると、その影響を受けて土地価格と建設費が高騰するようになった。その結果、ハロス市の住民が市内に土地を買い、自分のマイホームを建てようとする場合、ハロス市の中心地の郊外にある比較的安い土地を購入するようになり、ハロス市の都市空間が住宅建設によって拡大していった。

この住宅建設というテーマと男性にとっての社会化のプロセスには、興味深い繋がりがある。ハロス市には、農村社会の土地と住居所有についての伝統的な考え方、すなわち、責任ある夫・父親は妻のため、子供のために自分の土地を持ち、住居を構えなくてはならない、という考え方が未だに住民の間で根強く残っている。そのため、既婚男性、結婚予定の男性は、マイホームを持つプレッシャーを相当感じており、米国での出稼ぎ労働が現実的な解決策と捉えられてきた。また、米国への出稼ぎが、特に若い男性にとっては、親族の中、同世代の交友関係の中で、通過儀礼のようになっている。一人前の男になること、社会人になること、女性にもてる男になることと、米国でドルを稼ぐことが密接に結びついているのである[5]。

4. 移民研究における事例研究の位置づけ

メキシコから米国への移民に関する研究は、従来他国へ人が出て行く現象としてのエミグレーション（Emigration）と外国から流れ込む人の流れとしてのイミグレーション（Immigration）を個別に調査する傾向にあった。しかし、80年代後半から、米国のダグラス・マッセイやメキシコのホルヘ・ドゥランが中心となって、送り出し社会と移住先で起こる社会変化の過程を総合的に見るパースペクティブが提唱され、移民が築くネットワークに注目し、移住先と送り出し社会の経済関係や社会関係が研究されるようになった。メキシコ西部出身の移民について、移民が米国に定住化している一方で、故郷に戻る願望がひとつのイデオロギーのように移民の間で表現されていることが、マッセイらによって指摘されている［Massey et al. 1991］。なお、ハロス市を含むハリスコ高地は、彼らが研究を行ってきたメキシコ西部に位置し、彼らが指摘する米国への「移民」現象の歴史的背景や特徴が見られる。

他方、80年代終わりから、90年代にかけて、移住先と送り出し国の繋がりについては、トランスナショナルな視座を提案した人類学者たちによってより深く議論された。「トランスナショナルな移民の回路」［Rouse 1991］、「トランスナショナル・コミュニティー」［Kearney and Nagengast 1989］、「トランスナショナルな社会領域」［Faist 1999］といった、新しい空間モデルや「受け入れ国と送り出し国を結びつける社会領域を移民が構築するプロセス」としての「トランスナショナリズム」［Glick Schiller et al. 1992］といった概念が提案された。こうした移民研究の流れの新しさとは、国家を文化、社会関係、社会プロセスを境界付ける「容器」としてとらえるスタンスである「方法論的ナショナリズム」［Wimmer and Glick Schiller 2003］を批判し、受け入れ国と送り出し国の繋がりの質的調査から、親族関係、経済、政治、宗教、文化を研究し、移民研究のテーマを多様化させ、さらに国境の両側で起こる変化のプロセスを記述・分析することであった。

前述の二つの移民研究の傾向を踏まえて、筆者は「移民が米国の移住先とメキシコの送り出し社会の繋がりを構築・維持・強化するのに、ノスタルジーという感情がどのような役割を果たしているのか」という問題提起を博士論文で行った。

Ⅱ．研究対象としてのノスタルジー

ノスタルジーとは17世紀後半にスイス人医師のヨハネス・ホーファーが作った造語で、ギリシャ語の「家に帰る」という意味のnostosと「苦しみ」を意味するalgosから構成されている。欧米では長い間ノスタルジーは病気と考えられてきたが、現在では移動と関連した感情と認識されている。移動に伴い故郷と家族や友人と離れることで生まれる悲しみ、不快感、心の痛みを意味し、スペイン語では「ノスタルジーを感じる」(sentir la nostalgia) と表現されるだけでなく、「懐かしく思う」(añorar) や「恋しい」(extrañar) という動詞でも表現される。ハロス出身の詩人や作家や移民の語りを分析すると、郷愁の念、故郷を失った喪失感、故郷との繋がりを維持したい、故郷に戻りたいという願望として表現される［Hirai 2009: 21, 105-108］。

1. 感情の概念化

筆者が博士課程在籍中に行ったノスタルジーに関する民族誌学的研究では、人類学者のルッツとホワイトが提案した「社会的構築物としての感情」という見方、そして感情の社会的側面の描写・分析という考えを取り入れた。また、万国共通の基本的な感情がある一方、各社会、文化、歴史的背景の特殊性を考慮して、感情の意味やニュアンス、表現を理解するアプローチの仕方も取り入れた［Lutz and White 1986］。こうした感情の文化的多様性と各社会の感情の特殊性をフランス人人類学者ル・ブルトンは「情動の文化」(cultura afectiva) と呼んでいる［Le Breton 2012］。

さらに、感情が他者に表現される側面、つまり感情のコミュニケーション的側面に焦点を当て、その政治性に注目するという見方［Lutz and Abu-Lughod 1990］も感情を概念化する際に取り入れた。そして、ロサルドが指摘したように感情は「文化的な力」(cultural force of emotions) をもち［Rosaldo 1989］、人を特定の考え、態度、行動へ突き動かす衝動であると捉え、感情は構築され、表現されるだけでなく、社会関係や個人・集団の行動に作用を及ぼす効果をもつものであるという考えも取り入れた。

感情に注目して「移民」現象を研究するという試みは、研究対象である移民を統計上の数値や労働市場における労働力などと捉えるマクロな視点からアプローチしてきた従来の移民研究とは、全く異なるものであった。特に、「利益を最大化する合理的な個人としての移民やその家族」という前提から、研究対象を捉え、「移民」現象の原因を理論化する試みとは全く異色のアプローチであった。こうした従来の移民研究の傾向とは対照的に、感情に注目することの意義とは、マクロな視点のみならず、ミクロの、社会現象を生きる当事者の視点から「移民」現象とそれを契機に起こる複数のプロセスを研究することであると考えた。そして、「移民」現象の中で構築され、表現される感情、そして社会関係や様々なプロセスに影響を与える感情を研究することを試みた。

2. 移民のノスタルジーの語りと故郷のイメージ

日本人である研究者が、メキシコ人の感情をスペイン語を使って研究すること自体が、この調査の大きな挑戦であったが、幸いフィールドワーク中にハロス出身者の故郷に対する思いが語られた多様で豊富な資料に出会うことができた。筆者自身が米国在住の移民と行ったインタヴュー

だけでなく、ハロスから出て行った人々の故郷に対する想いが表現された詩集、郷土史、写真集に収められたエッセイや80年代にカリフォルニア在住の移民がハロス出身者に取材してまとめた本、ハロス出身の作詞作曲家が作った歌など、豊富に収集することができた。こうした資料を分析すると、ノスタルジーという感情は、故郷であるハロスから空間的にだけではなく、時間的に離れること、故郷と移住先の社会規範の違いや文化的なギャップを経験することから生まれる喪失感であることが分かった。

また、80年代に出版されたハロス出身者のインタヴューをまとめた本やライフヒストリーとハロスに対する感情を語ってくれた移民とのインタヴューを分析することで、以下の点が分かった。

①「貧しい農村から出て、米国へ出稼ぎし、都市で働く」という近代主義的な意味での「プログレッソ」（進歩）の願望が、米国への労働目的の移民を突き動かしてきた動機であり、移住先で起業し、ランチョの主のように独立してアメリカン・ドリームを実現することが主な言説として1980年代は米国に移住したハロス出身者の間では奨励されていたようである。

②しかし、多くの移民にとって米国で安価な労働力として働き、マイノリティとして生活し続けるのが現実であり、彼らにとって、米国の都市における現実の生活は、「ディストピア」であり、その外部にある故郷と過去がユートピアとして想起されていたと考えられる。

③また、郷愁の念とはいつも人を落ち込ませ、憂鬱にさせる感情というより、2月と8月のハロス市の地元の祭りの時期にメキシコに戻れないときに高まる感情であり、ある種の移民の「感情カレンダー」のようなものがある、ということもフィールドワークをする中で気づいたことであった。

④ハロス出身の移民にとって、地元の祭りは、信仰心、地元社会への帰属意識、家族との絆を再確認する機会であり、また米国の厳しい社会規範から一時的に逸脱して、歌って飲んで自由を謳歌し、稼いだドルのおかげで、地元民よりも購買力があり社会的ステータスの向上を一時的に体験できる機会でもあると捉えられている。

⑤また、独身男性にとっては、故郷の祭りは、恋人を探し、恋愛関係を維持する大切な機会であると考えられている。父権的な男らしさ、伝統的なジェンダー関係を理解してくれる相手は、米国で見つけることは難しいが、ハロスなら見つかると若い男性から期待されている。

⑥米国で生まれ育った子供がいる家庭では、ハロスの祭りに参加することは自分の子供が故郷の伝統文化やメキシコの文化を体験し学ぶ大切な機会と考えられている。

⑦しかし、既婚男性がハロスを理想化し、いつかは帰国して故郷に定住したいという願望を持つ一方で、既婚女性は、夫の本帰国の夢には基本的に反対する傾向にある。

こうした移民にとっての故郷の祭りの意味（④から⑥）を反映する形で、詩集や歌、エッセイ、祭りのポスターやパンフレットでは、ハロスは主に守護聖母への信仰の源としての「聖地」、「美しく理想的な女性がいる場所」、「自由を謳歌できる農村」といった3つのイメージで表象されている。また、こうした豊富な資料から分かったことは、ノスタルジーという感情は、「移民」現象の中でハロスの歴史的、文化的背景の中で構築された感情であり、同時に、移民の経験を表現

するものでもあるが、しかしその一方で、移民に向けて特定のイメージを想起させる言説として発信される側面も持っているということである。

Ⅲ．故郷との繋がりを構築する移民の様々な実践

離れた故郷との繋がりを維持したい、故郷に戻りたいという願望は、前述したように、ハロスの歴史・社会・文化的背景の中で構築された感情であり、また経験された感情や他者に向けて発せられる言説として表象されるだけでなく、次に説明するように、移住先で移民の行う様々な実践の原動力ともなっており、移民の行動に作用する「文化的な力」をノスタルジーは持っている。

1．故郷のシンボルを収集する

日常生活における個人レベルの実践では、故郷のシンボルを所有する行為にノスタルジーがその動機として反映されている。カリフォルニアでのフィールドワークの際に訪れたハロス出身者の家庭には、住居の一部に居住者が収集したハロス関連のグッズを展示するスペースがあった。家族写真、守護聖母の像、帰省中に購入したハロスのロゴ入りのTシャツ、帽子やキーホルダー、祭りのポスターや祭りの映像のDVDやビデオテープ、郷土史に関する本や雑誌、ハロスの風景や生活をテーマとした写真集や詩集、ハロスの作詞作曲家の歌のCD、故郷の教会の鐘の音や地元の生演奏の音楽を録音したカセットテープなど。ハロス出身者のライフヒストリーや彼らのハロスに対する感情について話を聞くときは、こうしたハロスを表象する様々なモノが陳列された「ミニ博物館」のようなスペースに通されインタヴューを行い、あるトピックスを話す際には、ハロスに対する帰属意識や思い出話の逸話に関連するモノを取り出して話してもらう機会が多々あった。ハロスのことが恋しくなったら、こうしたスペースで時間を過ごし、訪問客に自分を語る際にもこうしたスペースを利用しているようであった。

写真4　フィールドワーク中に収集したハロスを表象するモノ

こうしたハロスの思い出を呼び起こし、故郷との繋がりをシンボリックな形で維持するために使われるモノは、人類学者のジャネット・ホスキンスが言う自分のライフヒストリーやアイデンティティを語るための「バイオグラフィカル・オブジェクト」であると言える［Hoskins 1998］。

写真4は、筆者自身がハロス市でのフィールドワーク中に収集した祭りのポスターや帰省した移民が購入していた写真集や郷土史の本で、収集したハロスを表象するモノの筆者のコレクショ

ンの一部である。博士論文執筆中に、自宅の書斎をハロス出身の移民を真似て、こうしたハロス関連のモノを陳列してスペースにしてみたが、カリフォルニアでフィールドワークをした際に筆者が所蔵しているのと同じポスターや本などが、移民の自宅のミニ博物館に置いてあったことに気づいた。ハロスのイメージを表象するモノに対する執着心としてのフェティシズムは、筆者の場合は学術的な関心から生まれたものであった。米国に定住しているハロス出身者の場合は、所蔵しているコレクションは非常に豊富である。ハロスに関連するモノは数十年かけて収集されたもので、長い間強い執着心が維持されてきたことが窺われた。

2. 移住先（カリフォルニア）で同郷者が集まる

ハロスに対するノスタルジーは、移住先で同郷出身者同士が集まり、集団で様々な活動を行う動機にもなっていた。例えば、1960年代から70年代にかけて、ロサンゼルス、アナハイム、サクラメントでは、ハロストティトラン社交クラブという団体が結成され、同郷出身者同士の親睦を深めることに大きく貢献した。ロサンゼルスで結成された社交クラブは、故郷の教会にある被昇天の聖母像の複製を作り、南カリフォルニアまで運搬し、それを使用して毎年8月に守護聖母の祭りを実施してきた。また、故郷で2月に実施されるカーニバルのリバイバル版ともいえる行事であるミス・ハロス・コンテストやダンスパーティーを実施した（**写真5**）。

写真5　1971年にロサンゼルスのハロス社交クラブが実施したミス・ハロス・コンテストの参加者

この団体は、70年代にカリフォルニアで中古の救急車を購入し、ハロスまで運び、故郷の赤十字施設の開設にも貢献した。こうした故郷への援助活動は、現在はオレンジ郡にあるハロストティトラン財団に受け継がれている。また、10年近く前から、11月の感謝祭の休暇中には、アナハイムでカリフォルニア在住のハロス出身者が集まりサッカー大会が行われ、カリフォルニアの様々な地域からチームが参加するだけでなく、ハロスからも選抜チームが遠征して大会に参加していた（**写真6**参照）。

写真6　2013年のサッカー大会優勝チームと準優勝したハロス選抜チーム

このように、故郷と繋がりを維持したいという願望は、言葉として表現される感情として現れるだけでなく、集団的実践の動機としても移民の行動に作用している。

3. 故郷の宗教行事の実施

ハロスの被昇天の聖母像の複製は、南カリフォルニアだけでなく、北カリフォルニアのトゥールロック（Turlock）のカトリック教会にもある。これらの複製を使用して、8月に一時帰国できないハロス出身者が参加できるように、移住先でも守護聖母の祭りが実施される（**写真7**参照）。南カリフォルニアの聖母像の複製は、祭りの時期以外は、ハロス出身者の家庭を巡回しており、これは故郷でも行われる宗教行事である。また、ハロスの宗教実践の一つとして、守護聖母を祀る教会の鐘が夜9時に鳴ると、住民は胸の前で十字を切るのだが、この習慣も移住先で取り入れ、カリフォルニアの夜7時に胸の前で十字を切り、ハロスの教会との絆を実感するようにと、ハロスの神父がミサで帰省者に対して奨励していた。

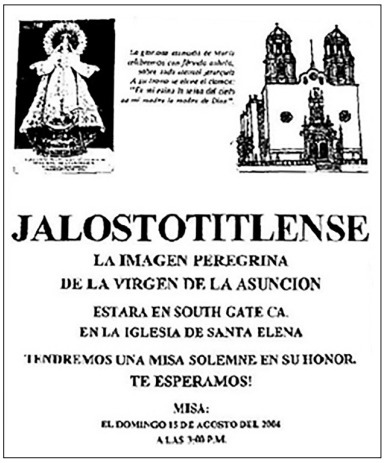


写真7　2004年8月にロサンゼルス郡サウス・ゲイトで実施された守護聖母のミサの告知

ハロス市近郊の村出身のトリビオ・ロモ神父は、1920年代後半に起こったクリステーロス戦争時の殉教者で、2000年にバチカンで聖者に認定され、ハロス出身者のみならず他の地域出身のメキシコ人移民の間でも移民の守護聖人として人気がある。このトリビオ神父の聖像も移住先のカトリック教会や移民の自宅に飾られている（**写真8・9**参照）。

写真8　アナハイムのSaint Boniface Catholic Church。祭壇の左側には、トリビオ神父の聖像と被昇天の聖母像が祀られている。

写真9　トリビオ神父

写真10　南カリフォルニアで実施された守護聖母の祭りの際に配布されたステッカー

米国で行われるこうした宗教行事は、信仰の源である故郷の教会への帰属意識を維持し、参加者同士の絆と集団的な感情を構築する場になっている。例えば、8月の守護聖母の祭りの参加者には、「私の心はハロスにある」（Mi corazón está en Jalos）というフレーズが記載されたステッカー（**写真10**）が配布され、ハロスへの帰属意識を同郷者同士で共有しようという主催者の意図が反映されている。

4. ホームランドのシンボルを消費する

南カリフォルニアには、ハロス出身者が起業したレストラン、スーパーのチェーン店などが多数存在し、ハロスの名前がついたタコス屋やバーなどもある（**写真 11・12・13** 参照）。

写真 11　タコス屋ハロス「メキシコの美味は我々の味」

写真 12　アナハイムのハロス・バー

写真 13　ノースゲート・ゴンサレス・スーパーマーケットのバン。「ハッピー・リターン・ホーム」（Feliz retorno a casa）というスローガーン。

メキシコ人移民に対して商品やサービスを提供するビジネスを経営するのは、ハロス出身者に限らず、メキシコの他の地域出身の移民の企業家もいる。1980年代以降もメキシコから移民の流入は継続し、南カリフォルニアの都市部では、ヒスパニック人口が増大し、それに伴い消費者としての移民を対象とした店舗が多く出店された。そうした店舗では、スタッフがスペイン語で対応し、メキシコ人が主要な顧客となっている。

写真 14　タコス、わが村

写真 15　「メキシコが恋しい」という名称の国際電話用プリペイドカード

店や商品の名称や広告には、農村（**写真 14**）、女性（**写真 12**）、聖地のイメージ（**写真 11**）を使ったり、家や故郷へ帰る（**写真 13**）、「私の」や「我々」といった用語を頻繁に使い（**写真 11・14**）、また故郷や祖国に対する帰属意識や感情を表現するフレーズ（**写真 11・15**）も掲載されている。故郷のイメージとそこへの郷愁を想起させる言葉が広告と商品や店の名前に採用されるの

は、米国には増え続けるヒスパニックを対象とした商品とサービスの市場が急成長しており、その市場ではノスタルジーが消費を喚起するためと考えられている［Mendoza Guerrero y Santamaria Gómez 2008］。

5. 移住先の都市空間の変容

ここまでノスタルジーと結びついた移民の移住先での様々な実践の具体例を紹介してきたが、1990年代から今世紀初頭に人類学、都市研究、移民研究で提案されたいくつかの概念と結びつけて、ノスタルジーについて少し解説してみたいと思う。アパデュライが提唱した移動する人と彼らが表象するアイデンティティから構成される風景としての「エスノスケープ」［Appadurai 1991］、マイク・デイビスが述べた送り出し国との繋がりからヒスパニック系住民が米国の大都市を再構築している現実としての「マジカル・アーバニズム」［Davis 2000］、移民が受け入れ国に統合されると同時に、送り出し国との繋がりを構築することは両立しうるプロセスであるという意味でのレヴィットとグリック・シラーが提案した「同時性」（Simultaneity）［Levitt y Glick Schiller 2004］、そして、「トランスナショナルな移民回路」という新しい社会空間に暮らす人に特徴的な「文化的二重焦点性」（cultural bifocality）［Rouse 1991］。これらの概念は、移動する人々のノスタルジーと密接に繋がっており、移住という経験から生まれた個人の感情と、言説として語られることで他者の感情に影響を与えながら構築された集団的感情としてのノスタルジーが、移住先で様々な実践を促し、受け入れ社会に故郷に似た文化空間を作り上げてきた。ノスタルジーが動機となって故郷のイメージや故郷の様々な文化実践を移住先の都市空間に埋め込むことで、自分たちの帰属意識を表象する場を築き、受け入れ社会に自分たちの領域（テリトリー）を再構築してきたことは、移住先における都市空間の変容の特徴と言える。

Ⅳ. 一時帰国する移民

故郷との繋がりを維持したいという願望と郷愁の念は、8月と2月のハロス市で開催される祭りの時期に移民とその家族が一時帰国する動機にもなっている。8月の守護聖母の祭りの時期には、地元住民のためだけにミサや宗教行列が実施されるのではなく、帰省者向けにも行われる（**写真16**）。また、この時期に米国やメキシコ各地から親族が帰省するため、洗礼、15歳の祝い、結婚式などのパーティーも行われ、式場は毎日賑わっている（**写真17**）。

写真16　8月の帰省者が参加する宗教行列

写真17　アシエンダを模したハロス市内の式場

「美しく理想的な女性」の表象が2月のカーニバルの特徴の一つで、ミス・ハロス・コンテストがこの祭りのメインイベントの一つとなっている（**写真18**）。「美しく理想的な女性」と出会うことが、移民一世と二世の独身男性にとっては重要な帰省の動機であり、多くの若者が2月と8月の祭りの最中に市内の広場で行われる恋人探しの儀式に参加する。また、バーやディスコは、祭りの時期は連日帰省者と地元民で賑わう。

写真18　カーニバルのパレード。この時期に実施されるミス・ハロス・コンテストの優勝者。

1. 一時帰国と消費

一時帰国の旅費は、例えば2週間のハロス滞在で2000ドルから5000ドルに及び、交通費を差し引いてもかなりの額のお金がハロスで使われる。帰省者は、地元のサービス業に従事する者にとって重要な消費者であり、ハロスの名前の入ったお土産やハロスに関する本や歌、祭りのビデオやDVDなどが販売される。また、2月のカーニバルの際には、ランチェラ音楽のメキシコの人気歌手のコンサートが闘鶏場で行われ（**写真19**）、闘牛やチャレアーダと呼ばれるメキシコ式ロデオのイベントも開催される。

写真19　メキシコの人気歌手のコンサート

写真20　ハロス市郊外の売りに出されている土地

写真21　廃墟となっていたアシエンダをカリフォルニア在住の移民が購入、修復し帰省時にのみ使用している住宅

また一時帰国には米国での生活を終了し定住目的で故郷に戻る帰還移住（return migration）の準備という側面もあり、滞在中に土地を購入したり（**写真20**）、住宅の建設やメンテナンスをする移民も多くいる[6]。2000年ごろから、本帰国を夢見る移民が建てる住居には、農村の古い屋敷（アシエンダ）の建築スタイルを盛り込むデザインがはやり、このブームは地元民にも浸透した（**写真17・21**）。

一時帰国は、米国在住者が送り出し社会に再統合されるプロセスと言えるが、彼らはカトリック教徒として教区に再統合されるだけでなく、消費者としても取り込まれ、社会参加する側面が特に顕著である。帰省者向けの商品とサービスの売り手にとっては、地元の祭りは売り上げを伸ばす重要な時期であり、彼らは帰省者の旅の動機が、ハロスへの帰属意識を再確認したいこと、自由な空間としての「農村」のイメージを求め、美しく理想的な女性に出会い、アメリカン・ドリームを達成した感覚を一時的に味わいたいことなどであることを熟知している。

写真22　メイド・イン・ハロス（左）、100%メキシコ製（右）

例えば、市内の土産屋で販売されていた「ハロス製」（Hecho en Jalos）というロゴ入りのTシャツは、中国製の安い輸入品を使うのではなく、米国の大手下着メーカーの元職員から研修を受けたスタッフがハリスコ州で生産しているしっかりした質の商品であった（**写真22**）。帰属意識を求めて帰省した人が買った商品が、外国製でがっかりするというようなことがないよう、100%メキシコ製と商品に記載し、Tシャツを着る人自身がハロスとメキシコにアイデンティティを見出そうという意欲を満たせられるような工夫がされている。

写真23　市役所が2000年に作った観光パンフレット「ハロストティトラン、心のふるさと」

また、祭りの時期に合わせて、地元の商業や教会だけでなく、市役所や芸術家、郷土史家さえも、帰省者向けの商品とサービスを準備し、郷愁の念をくすぐるキャッチフレーズを開発して

きた。例えば、市役所の観光パンフレットには、移民の心を動かし興味を惹きつける「聖地」や「農村」を表象する写真や帰郷の感情に関連したキャッチコピーが使われている（**写真 23**）。

2. 送り出し社会の都市化

90年代以降、在米メキシコ人のUターンは大規模な人口移動の現象となってきたが、一時帰国する移民は、労働者ではなく、余暇を過ごす消費者という側面を持ち、ハロス市では彼らが求める故郷のイメージに沿った商品とサービスが提供される現実がある。これがハロス市で第三次産業が拡大していった一つの要因であると言える。また、美化された農村、自由を謳歌できる空間としての農村、美しく理想的な女性に出会える場所、聖地といった、ある意味でステレオタイプ化されたハロスのイメージは、実際に地元の祭りの様々な行事でハイパーリアルな形で具現化されているという側面もある。

他方、一時帰国は、定住目的の帰還の準備という側面を持ち、祭りのシーズンに特に活発になる住宅建設は、故郷への移住の準備の一環とも捉えることができる。ランチョやアシエンダの屋敷を模倣した建築スタイルが移民や地元民の間で流行することで、故郷の景観の変化にもノスタルジーが反映され、また、農地が住宅地に変わっていくプロセスを促進してきた。さらに、住宅建設ブームが土地価格と建設費の高騰を引き起こした結果、移民しない地元民の大半は、ハロス市の郊外にある比較的安い土地を購入するか、米国に出稼ぎすることで、土地の購入費と建設費を確保することになる。

また、退職した移民一世のハロス市への移住は、米国に残る二世、三世の一時帰国を促すことにもなり、Uターンという現象が世代を超えて継承されていく。

このようにノスタルジーに注目することで、この感情に動機づけられた一時帰国を通じて、伝統的な農村社会が、小規模の地方都市へと移行していく現象も捉えることができる。このメキシコの地方都市の形成の特徴の一つは、「移民」現象とトランスナショナルなコネクションの形成が大きな要因となっているという点である［牧野・平井 2017; Makino and Hirai 2019］。

おわりに

最後に、ノスタルジーの経済的・政治的側面について解説したいと思う。ハロス市とカリフォルニアで行った民族誌的調査では、在米メキシコ人を単に労働者として見るのではなく、彼らを取り巻く様々なアクターがどのようにメキシコ人移民を捉えてきたかにも注目した。過去数十年間のメキシコ人移民流入によって、移住先で人口が増加し都市化が進行する最中、在米メキシコ人は、同郷出身者の団体が様々な活動を行うための重要な会員として捉えられてきた。また、移住先と故郷のカトリック教会からすると、彼らは教区の発展に大きく貢献する信者である。さらに、ハロス市役所や移民からの義援金を募るハロス財団からすると、移民は送り出し社会の地域開発への貢献者である。そして、受け入れ社会と送り出し社会のサービス業、マスメディア、郷土史家、芸術家にとっては、移民は非常に重要な消費者でもある。

こうした移民を取り巻くアクターたちは、在米メキシコ人が故郷との繋がりを構築・維持・強

化するために様々な社会的、文化的、経済的実践を行う上で重要な役割を持っている。移民を魅了する故郷のシンボルの効果と、ノスタルジーが移民をある方向に向かわせる衝動であり、それを引き起こす「文化的な力」[Rosaldo 1989] を持っていることをこうしたアクターたちは熟知しており、故郷のイメージと言説としてのノスタルジーを生産し、移民に向けて発信しているのである。博士論文を元に筆者が2009年に出版した民族誌では、「ノスタルジーのポリティカル・エコノミー」という概念を提案したが、それは送り出し社会と受け入れ社会に展開するこうした社会的現実を指している。

〈註〉

1　本稿ではハロス出身者と言及する場合、ハロス市で生まれた移民のことを指す。ただし、筆者が行った調査自体メキシコ生まれの男性、一世の視点が中心となっている。そうした意味で、二世と三世が、また移民一世の女性の視点からノスタルジーとハロス市との関わり方を見直すことが今後の調査の課題の一つである。

2　ハロス市があるハリスコ高地では、社会活動におけるジェンダーの境界が明確であり、筆者のフィールドワークに大きく影響し、参与観察や聞き取り調査は主に「男性の領域」で行うこととなった。既婚男性である筆者が、独身女性や既婚女性と会話する際には、時と場所、同席者などを十分考慮する必要があった。

3　ハロスがあるハリスコ高地にランチョ（Rancho）が出現したのは、16世紀後半にスペイン人の入植が始まってからである。銀山開発が始まったサカテカスと主要都市のグアダラハラとメキシコ・シティの中間点に位置するハリスコ高地は、銀山開発に必要な食料と運搬手段である馬を生産し、また労働力を確保する拠点となった。そして、スペイン人が家族で入植し、先住民と離れた場所で、農牧畜業を営むようになり、大地主が経営するアシエンダと小規模な農場としてのランチョが出現した。こうした形でハロスを含むハリスコ高地でクリオーリョの農村社会が形成された。植民地時代において、ランチョとは、農業と牧畜を営む家族が暮らす農場で、食料や馬などの家畜を生産する経済的機能を担っていただけでなく、家族のメンバーと労働力を再生産する社会的機能と、征服した土地に人を住ませ、開拓することで先住民の攻撃から守る政治的機能も果たしていた［Hirai 2009: 172-175］。

4　国家統計地理情報院（Instituto Nacional de Estadística y Geografía）の国勢調査の結果（INEGI, 2021, *Censo de Población y Vivienda 2020*, México: INEGI.）とHirai［2009: 179-180］を基に作成。

5　ハロスにマイホームを持ちたいという願望は、ハロス市で生まれ育った男性の間では顕著であるが、米国で生まれ育った二世、三世の男性でハロスに土地を購入し、家を建てようとする人は少ない、というのが筆者の印象である。ただし、親が故郷に建てた住宅が米国に住む二世に財産として相続される場合もあるので、二世の中には家の管理という課題がハロスを訪問する理由の一つになっている人もいる。

6　帰還、帰還移民、帰還移動と日本語に訳されるreturn migrationは、定住目的での祖国への移動として従来研究されてきた。しかし、トランスナショナルな視点から祖国への移動を見

直すことで、短期間の滞在目的で移民が行う一時帰国という特殊な移動形態に本研究では注目した。

〈参考文献〉

牧野冬生・平井伸治、2017、「地方都市を語るモデルとしての脱伝統的景観――メキシコ地方都市にみる想像的伝統と創作的伝統――」、『アジア太平洋討究』第28号、225-243ページ。

Appadurai, Arjun. 1991. "Global Ethnoscapes: Notes and Queries for a Transnational Anthropology", in Richard G. Fox (ed.), *Recapturing Anthropology: Working in the Present*, Santa Fe: School of American Research Press, pp. 191-210.

Davis, Mike. 2000. *Magical Urbanism: Latinos Reinvent the U.S. Big City*, New York: Verso.

Faist, Thomas. 1999. "Developing Transnational Social Spaces: The Turkish-German Examples", in Ludgar Pries (ed.), *Migration and Transnational Social Spaces*, Aldershot: Ashgate, pp. 36-72.

Glick Schiller, Nina, Linda Basch and Cristina Blanc-Szanton. 1992. "Transnationalism: A New Analytic Framework for Understanding Migration" *Annals of the New York Academy of Sciences*, vol. 645, núm. 1, pp. 1-24.

Hirai, Shinji. 2009. *Economía política de la nostalgia. Un estudio sobre la transformación del paisaje urbano en la migración transnacional entre México y Estados Unidos*, México: UAM-I y Juan Pablos Editor.

Hoskins, Janet. 1998. *Biographical Objects: How Things Tell the Stories of People's Lives*, New York: Routledge.

Kearney, Michael and Carol Nagengast. 1989. *Anthropological Perspectives on Transnational Communities in Rural California. Working Group on Farm Labor and Rural Poverty Working Paper 3*, California: California Institute for Rural Studies.

Le Breton, David. 2012. "Por una antropología de las emociones" *Revista Latinoamericana de Estudios sobre Cuerpos, Emociones y Sociedad*, No. 10, Año 4, diciembre 2012-marzo de 2013, pp. 69-79.

Levitt, Peggy y Nina Glick Schiller. 2004. "Perspectivas internacionales sobre migración: conceptualizar la simultaneidad" *Migración y Desarrollo*, núm. 3, pp. 60-91.

Lutz, Catherine and Lila Abu-Lughod (eds.). 1990. *Language and the Politics of Emotion*, Cambridge: Cambridge University Press.

Lutz, Catherine and Geoffrey M. White. 1986. "The Anthropology of Emotions" *Annual Review of Anthropology*, Vol. 15, pp. 405-436.

Makino, Fuyuki and Shinji Hirai. 2019. "The Role of Mexican Immigrants in the United States on the Imagined and Invented Traditions in Mexico's Regional Cities" *Hispanic Journal of Behavioral Sciences*, Vol. 41, No. 2, pp. 1-17.

Massey, Douglas S., Rafael Alarcón, Jorge Durand y Humberto González. 1991. *Los ausentes: El proceso social de la migración internacional en el occidente de México*, México: CONACULTA y

Alianza Editorial.

Mendoza Guerrero, Juan Manuel y Arturo Santamaría Gómez. 2008. *El consumo de la nostalgia: los inmigrantes latinoamericanos y la creación del mercado hispano en los Estados Unidos*, Sinaloa: Universidad Autónoma de Sinaloa.

Mummert, Gail. 2012. "Pensando las familias transnacionales desde los relatos de vida: análisis longitudinal de la convivencia intergeneracional", en Marina Ariza y Laura Velasco (eds.), *Métodos cualitativos y su aplicación empírica: Por los caminos de la investigación sobre migración internacional*, México: IIS-UNAM, pp. 151–184.

Rosaldo, Renato. 1989. *Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis*, Boston: Beacon Press.

Rouse, Roger. 1991. "Mexican Migration and the Social Space of Postmodernism" *Diaspora: A Journal of Transnational Studies*, Vol. 1, No. 1, pp. 8–23.

Wimmer, Andreas and Nina Glick Schiller. 2003. "Methodological Nationalism, the Social Sciences, and the Study of Migration: An Essay in Historical Epistemology" *International Migration Review*, Vol. 37, No. 3, pp. 576–610.

（ひらい　しんじ　メキシコ社会人類学高等研究所CIESAS東北キャンパス教授）